12　次の文章は、長保元年（九九九年）十一月一日に、藤原道長（九六六～一〇二七年）の長女の藤原彰子（九八八～一〇七四年）が、一条天皇（九八〇～一〇一一年・在位九八六～一〇一一年）の女御として十二歳でし、宮中の藤壺（）に住居を定めたときのことを記述したものである。このとき一条天皇には、すでに中宮として藤原定子（九七六～一〇〇〇年）がいた。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

〈東京都立大〉二〇二三年度出題

　※、に渡らせたまへれば、御しつらひはさもこそあらめ、の御有様もてなし、あはれにめでたくし見たてまつらせたまふ。「宮をかやうにほしたてまつらばや」と（ａ）思しめさるべし御みなねびととのほらせたまひ、（ｂ）およすけさせたまへれば、ただ今この御方をば、わが御姫宮をかしづきゑたてまつらせたまへらむやうにぞぜられける。

　年ごろの御目移り、たとしへなくあはれに（１）らうたく見たてまつらせたまふべし（ｃ）渡らせたまふよりして、この御方のひは、ただ今あるそら①なら②ねば、もしは何くれののにこそあん③なれ、何ともかかえず、何ともなくしみら④せ、渡らせたまひての御は他御方々に似ず思されけり。はかなきの箱、のの内よりして、

（２）をかしうめづらかなる物どもの有様に御覧じつかせたまひて、明けたてばまづ渡らせたまひて、御など御覧ずるに、いづれか御目とどまらぬ物のあらむが歌絵かきたるに、※の歌書きたるなど、いみじうをかしう御覧ぜらる。「あまりものじするほどに、むげに知らぬ（Ⅰ）れにこそなりぬべかめれ」など仰せられつつぞ、（ｄ）帰らせたまひける。

　昼間などにりては、「（Ⅱ）あまり幼き御有様なれば、参りよればとおぼえて、われ恥づかしうぞ」などのたまはするほども、ただ今ぞ二十ばかりに（ｅ）おはしますめる。同じと申しながらも、いかにぞやかたなりに飽かぬところもおはしますものを、この上は、いみじう御かたちよりはじめ、（３）きよらにあさましきまでぞおはします。

　（４）大などはすこしきこしめしけり。御笛をえもいはず吹きすまさせたまへ⑤れば、さぶらふ人々もめでたく見たてまつる。（ｆ）うちとけぬ御有様なれば、「これうち向きて見たまへ」と申させたまへば、、「（Ⅲ）笛をば声をこそ聞け、見るやうやはある」とて、（ｇ）聞かせたまはねば、「さればこそ、これや幼き人。七十の翁の言ふことをかくのたまふよな。あな恥づかしや」とれきこえさせたまふほども、さぶらふ人々、「あなめでたや。この世のめでたきことには、ただ今のわれらが交らひをこそせめ」とぞ、（ｈ）言ひ思ひける。にはのことも並ばせたまふ人なき御有様におはします。

（『栄花物語』より）

※注

上＝一条天皇。

姫宮＝脩子内親王（九九七～一〇四九年）。一条天皇と定子の間に生まれた第一皇女。

他御方々＝彰子（十二歳）以外の一条天皇の中宮・女御たちのこと。具体的には、中宮定子（二十三歳）、元子（生没年不詳）、義子（二十六歳）、尊子（十六歳）ら。

打橋＝殿舎の間の渡り廊下の切れたところに掛けられる、取り外しのできる橋。

弘高＝巨勢弘高（生没年不詳）。当時の代表的な画家。

行成君＝藤原行成（九七二～一〇二七年）。能書家としての一人に数えられる。

なにはのこと＝何はのこと。どんなこと。和歌では「難波の事」に懸けて用いられる。

問１　波線部（１）～（４）を現代語に訳せ。

問２　傍線部①～⑤の助動詞の意味を次のＡ～Ｈの中から一つ選んで記号で答えよ。答えは同じ記号を何度用いてもよい。

Ａ　打消

Ｂ　推定・伝聞

Ｃ　自発

Ｄ　受身

Ｅ　尊敬

Ｆ　断定

Ｇ　使役

Ｈ　完了

問３　傍線部（ａ）～（ｈ）の主語にあたる人物を次のア～キの中から一つ選んで記号で答えよ。答えは同じ記号を何度用いてもよい。

ア　上

イ　女御殿

ウ　姫宮

エ　他御方々

オ　弘高

カ　行成君

キ　さぶらふ人々

問４　二重傍線部（Ⅰ）について、これはどのようなことか、問題文に即して説明せよ。

問５　二重傍線部（Ⅱ）の「あまり幼き御有様」とは反対の意味の評価となる箇所を問題文中から探して二五字以内で抜き書きせよ（句読点も字数に含める）。

問６　二重傍線部（Ⅲ）について、この発話の内容と、発話が出た状況を説明せよ。

◎問７　一条天皇は藤原彰子に対してどのように感じ、また、その言動に対処したか、問題文中にある一条天皇の気持ちの移り変わりに添って、一〇〇字以内で答えよ（句読点も字数に含める）。

※〔改題〕問いの表記を一部改めている。

【解答と採点基準】

問１　（１）＝かわいらしく見申し上げなさるだろう

「かわいらしく」がなければ全体０。

「見申し上げ」と謙譲の補助動詞の訳がなければ減点２、「なさる」と尊敬の補助動詞がなければ減点２、「だろう」と推量の意で訳していなければ減点２。

　　　（２）＝Ａ趣深くＢいかにも珍しい物たち

Ａ＝５〔「趣深く・美しく」と訳していなければ不可。〕

Ｂ＝５〔「珍しい・めったにない」と訳していなければ不可。〕

（３）＝Ａ上品で美しく、Ｂ驚きあきれるほどまでにすばらしいＣご様子でいらっしゃる

Ａ＝４〔「美しく」と訳していなければ不可。〕

Ｂ＝４〔「驚きあきれるほど」と訳していなければ不可。〕

Ｃ＝２〔尊敬の補助動詞がなければ不可。〕

　　　（４）＝お酒などは少し召し上がった

「きこしめし」を「召し上がる」と訳していなければ全体０。文末を「た」と過去に訳していなければ減点２。

問２　①＝Ｆ　　②＝Ａ　　③＝Ｂ　　④＝Ｇ　　⑤＝Ｈ

問３　（ａ）＝ア　　（ｂ）＝エ　　（ｃ）＝ア　　（ｄ）＝ア

　　　（ｅ）＝ア　　（ｆ）＝イ　　（ｇ）＝イ　　（ｈ）＝キ

問４　Ａ女御の持ち込んだ調度類に気を引かれすぎて、Ｂ政治がおろそかになるなど、Ｃ天皇として愚かだということ。

Ａ＝４〔「女御の道具類に」「気を引かれる」などと具体的でなければ不可。〕

Ｂ＝３〔同内容可。〕

Ｃ＝３〔「天皇として」といった内容がなければ不可。〕

問５　ねびととのほらせたまひ、およすけさせたまへれ（22字）

問６　Ａ笛は音色を聞くものであり、見るものではないという内容で、Ｂ一条天皇が打ち解けない女御に吹いていた笛を見せようとしたのに対して、Ｃ女御が機知に富む返答をしたという状況。

Ａ＝４〔同内容可。〕

Ｂ＝３〔「一条天皇が女御に笛を見せた」という内容がなければ不可。〕

Ｃ＝３〔「女御が答えた」という内容がなければ不可。〕

問７　Ａ初めは様子や振る舞いに感心し、Ｂ理想的な娘の姿だと感じたが、Ｃ女御の部屋の香りや調度類のすばらしさにすっかり魅了され、Ｄ女御の幼さと自分を比べて自虐的な冗談を言うようになり、Ｅ周囲も賞賛するほど寵愛を深めた。（100字）

それぞれ同内容可。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２

【現代語訳】

　一条天皇が、藤壺にお越しになったところ、お部屋の飾り付けのご様子はいかにもそうであろうが、女御（＝藤原彰子）のご様子や振る舞いは、しみじみと見事だとお思いになり見申し上げなさる。「（自分の娘の）脩子内親王をこのように育て申し上げたい」と（一条天皇は）お思いになるはずだ。彰子以外の中宮・女御たちは皆成長して容姿が整っていらっしゃり、大人びていらっしゃったので、ただもう今はこのお方を、ご自分の姫宮をそばに置いて大切にお育て申し上げなさるようにご覧になった。

　ここ数年の（中宮・女御たちを）見慣れた御目は、比較しようがなく（このお方を）しみじみと問１（１）かわいらしく見申し上げなさるだろう。（一条天皇が）打橋をお渡りになるとすぐに（漂ってくる）、このお方の（お部屋の香の）香りは、今（どこにでも）あるような空薫物でないので、あるいは誰それの（作った）香の香りであるそうだが、何とも香りがわからないで（漂って）、なんとも（言いようも）なく深く香らせ、（お部屋に）お越しになってからの御移り香は彰子以外の中宮・女御たち（の所）とは違うとお思いになった。ちょっとした御櫛箱や、硯箱の中（に入れてある物）からして、問１（２）趣深くいかにも珍しい物たちの様子に（一条天皇は）すっかりお心を奪われなさって、夜が明けるとすぐ（彰子のお部屋に）お越しになって、御厨子などもご覧になると、何一つお目のとまらない物があろうか、いやあるはずもない。巨勢弘高の歌絵を描いた冊子に、藤原行成卿が歌を書いた物などを、たいそう趣深くご覧になる。「あまり面白がっているうちに、まるで政治のわからない愚か者になってしまいそうだ」などとおっしゃりながら、（一条天皇は）お帰りになった。

　昼間などにおやすみになっては、「あまり幼いご様子なので、お近くに寄り申し上げると（自分の方が）老人かと思われて、私は恥ずかしくなるよ」などとおっしゃるのも、（一条天皇は）現在二十歳くらいでいらっしゃるようだ。同じ帝と申しても、（力量が）不十分でもの足りない方もいらっしゃるものだが、この一条天皇は、すばらしくご容貌をはじめとして、問１（３）上品で美しく、驚きあきれるほどまでにすばらしいご様子でいらっしゃる。

　問１（４）お酒などは少し召し上がった。御笛を表現のしようがなく音色を冴えわたらせて吹きなさったので、お仕え申し上げる人々も見事だと見申し上げている。（彰子は）打ち解けないご様子であるので、「この笛をこちらを向いてご覧なさい」と申し上げなさると、女御殿は、「笛は音色を聞くが、見るわけがあろうか、いやない」と言って、お聞きにならないので、「だから、あなたは幼い人（なの）だ。七十歳の老人の言うことをこのようにおっしゃることよ。ああ恥ずかしいなあ」と冗談を申し上げなさるご様子も、お仕え申し上げる人々は、「ああすばらしいなあ。この治世のすばらしいこととしては、今の私たちの宮仕えをもって言おう」と、言って心に思った。（一条天皇は）どんなことも肩をお並べになる人もないご様子でいらっしゃる。